清華大学蔵戦国竹簡『畏天用身』訳注(1)*

宮島和也

参考文献

[中国語文献]

曹峰 2024.「清華簡《畏天用身》的結構與義理」，『江淮論壇』1:21-30

陳民鎮・宋亞飛 2024.「清華簡《畏天用身》校讀」，『國學學刊』1：69-83

陳剣 2007.「說愼」，陳剣『甲骨金文考釋論集』39-53，北京:綫裝書局

程浩 2023.「由清華簡《畏天用身》的"径圓""軫方"說《老子》的"和光同塵"」，『中国文化研究』2023 冬之巻 27-30

董蓮池編著 2011.『新金文編』，北京:作家出版社

宮島和也 2024.「上古漢語"也""毆""𣪊"的地理分佈及其演變補論」，野原将揮・池田巧編『シナ＝チベット系諸言語の文法現象 6 類型論と史的変化』213-224

賈連翔 2015.『戰國竹書形制及相關問題研究：以清華大學藏戰國竹簡為中心』，上海:中西書局

李零 2002.『郭店楚簡校讀記錄（增訂本）』，北京:北京大學出版社

李守奎 2015a「清華簡《繫年》"也"字用法與攻𢦏王光劍、書缶的釋讀」，李守奎『古文字與古史考：清華簡整理研究』207-218，上海:中西書局

李守奎 2015b.「清華簡《筮法》文字與文本特點略說」，李守奎『古文字與古史考：清華簡整理研究』335-345，上海:中西書局

李守奎・賈連翔・馬楠編著 2012.『包山楚墓文字全編』，上海:上海古籍出版社

羅雲君 2018.「清華簡『越公其事』研究」，東北師範大学修士論文

駱珍伊 2023.「淺析《清華拾叁・畏天用身》簡 3 至簡 5 的句式與內容」，清華大學出土文獻

* 本訳注は京都大学人文科学研究所課題公募班(萌芽研究)「上古中国における書写の解明：戦国楚簡を中心に」、JSPS 科研費「上古中国語における書記言語の地域的特徴の展開：春秋戦国・秦漢時代出土文献を中心に」(24K16068)および「2025 年度成蹊會學術教育研究助成金」の成果の一部である。上記の京都大学人文科学研究所課題公募班（萌芽研究）では宮島和也・市原靖久・片倉峻平の各班員が分担し清華簡『畏天用身』の訳注を作成した。本稿は 2025 年 5 月 24 日に行われた第 1 回研究班において、宮島が行なった報告を基に、参加者にいただいた意見・コメントを踏まえて加筆・修正を行なったものである。この他、Maddalena Poli 氏(Yale University)にも『畏天用身』に関する貴重な情報や意見をいただいた。

研究與保護中心網站，2023 年 12 月 19 日。
劉剛 2014.「清華參《良臣》為具有晉系文字風格的抄本補證」,『中國文字學報』5:99-107
劉子珍 2024.「由分而和：清華簡《畏天用身》與戰國天人觀念重構」，『江淮論壇』1:47-54
馬承源 1988.『商周青銅器銘文選』第三巻，北京:文物出版社
馬承源主編 2001.『上海博物館藏戰國楚竹書（一）』，上海:上海古籍出版社
馬承源主編 2003.『上海博物館蔵戦国楚竹書（三）』，上海:上海古籍出版社
馬承源主編 2005.『上海博物館蔵戦国楚竹書（五）』，上海:上海古籍出版社
清華大學出土文獻研究與保護中心編・李學勤主編 2013.『清華大學藏戰國竹簡（肆）』，上海:中西書局
清華大學出土文獻研究與保護中心編、黃德寬主編 2019.『清華大學藏戰國竹簡（玖）』，上海:中西書局
清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編 2023.『清華大學藏戰國竹簡（拾叁）』，上海:中西書局([整理者])
饒宗頤主編 2012.『上博藏戰國楚竹書字匯』，合肥:安徽大學出版社
石小力 2017.「上古漢語“玆”用為“使”說」，『語言科學』6：658-663
石小力 2023.「清華簡《畏天用身》中的天人思想」，『中國史動態研究』5:67-72
蘇建洲 2018.「清華簡（八）《天下之道》考釋兩則」，復旦大學出土文獻與古文字研究中心網站，2018 年 11 月 26 日
湯志彪編著 2013.『三晉文字編』，北京:作家出版社
武漢大學簡帛研究中心・荊門市博物館編著 2011.『楚地出土戰國竹簡帛合集（一）：郭店楚墓竹書』，北京:文物出版社
吳振武 2006.「試說平山中山王墓銅器銘文中的“旃”字」,『中國文字學報』1:73-76
徐在國 2006.『傳抄古文文字編』、北京:綫裝書局
禤健聰 2017.『戰國楚系簡帛用字習慣研究』，北京:科學出版社
張新俊・張勝波 2008『新蔡葛陵楚簡文字編』，成都:巴蜀書社
趙平安 2016.「《清華簡（陸）》文字補釋（六則）」清華大學出土文獻研究與保護中心網站，2016 年 4 月 16 日
趙平安 2017.「清華簡第七輯字詞補釋（五則）」，『出土文獻』10:138-143
子居 2024.「清華簡十三《畏天用身》解析（一）」,
http://www.360doc.com/content/24/0901/23/34614342_1132907932.shtml

[日本語文献]
小寺敦 2017.「清華簡『子犯子餘』譯注」,『東洋文化研究所紀要』177:232-306
福田哲之 2016.「清華簡『良臣』・『祝辞』の書写者」,『中国研究集刊』62:52-73
松江崇 2023.『古漢語における疑問目的語の語順変化メカニズム』，京都大学博士論文

[英語文献]
Schuessler, Axel. 2009. *Minimal Old Chinese and Later Han Chinese: A Companion to Grammata Serica Recensa,* Honolulu:University of Hawai'i Press

清華簡『畏天用身』の概要・形制等について

清華簡『畏天用身』は 17 簡から成り、欠落は無い。各簡の長さは 44.4 ㎝、幅は 0.6 ㎝。背面にはいわゆる刻劃の痕跡があるが[1]、順番を示す数字や編題は無く、『畏天用身』は整理者が内容に基づき命名したものである[2]。簡の最上部・中間部(1 号簡でいえば 21 字目「聖」の後)・最下部に編縄の痕跡と思しきものが見られる。文字に関しては、基本的にはいわゆる楚系文字で書かれているが、以下の訳注で指摘する通り、字形や文字遣いに所他地域の要素と思しきものが垣間見える。

賈連翔(2015:117-119)は当時公開されていた楚簡竹書(＝文書、遣策、日書、卜筮祭祷簡などを除くいわゆる「書籍」)111 篇を竹簡の長さに応じて下表[3]の通り分類し、またその割合を示しているが、これによれば清華簡『畏天用身』の 44.4 ㎝という長さは「45 釐米」に分類され[4]、楚簡で最もよく見られる長さであると言える。

序號	長　度	篇　目		竹　簡	
		篇 數	比 例	簡 數	比 例
1	55 釐米	16	14.4%	236	10.6%
2	48 釐米	5	4.5%	132	6.0%
3	45 釐米	46	41.5%	826	37.2%
4	39 釐米	4	3.6%	70	3.1%
5	33 釐米	26	23.4%	563	25.3%
6	27 釐米	9	8.1%	123	5.5%
7	16 釐米	5	4.5%	274	12.3%

また、賈連翔(2015: 117-119)を参考に、ほぼ同じ長さの楚簡をいくつか取り出し、その 1 号簡(清華簡『厚父』は 1 号簡に欠落が多いため 2 号簡)をサンプルとして字数を調べると、下表の通りとなる。

[1] ただし、図版を見る限り、明確ではない。
[2] 以上、[整理者]による。
[3] 賈連翔(2015:119)。
[4] 「45 釐米」には 42～46 ㎝のものが含まれる。

上博簡 『陳公治兵』	上博簡 『容成氏』	清華簡 『皇門』	清華簡 『繫年』	清華簡 『厚父』
37	43	41	29	36

一方、清華簡『畏天用身』の 1 簡あたりの字数は下表の通りである。

簡	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17
字数	45	50	46	47	48	50	48	46	46	46	41	42	44	41	46	45	14

このように、他の楚簡と比較すると清華簡『畏天用身』は 1 簡あたりの字数が比較的多いと言える。また 1 簡あたりの字数も一定せず、(最終の 17 号簡を除けば)最少が 41 字(11・14 号簡)、最多が 50 字(2・6・号簡)と 9 字の開きがあることや、異様に字間の詰まった箇所が散見されること、いわゆる墨釘が極めて多いということも、特徴的であると指摘できよう。

隷定

畏天智▬甬身足▬審𤰈聖▬善出言▬𢘓牆乍▬𢘓心志▬聖不聖𥘉𣃔▬言牆是之甬▬乍不可𢘓也▬志不可𢘓也乍逕囡也▬不逕不[一号簡]







囡▬曲出者囡=生𩑋=生利▬句諄能備囡▬行利𢆶利▬天下亡㠯𢀛利害𢘓方也不𢘓不方▬直出者方=生丏=生灋▬句𧯞能備方▬行丏▬𢆶果丏▬[二号簡]

天下亡以𢀛丏▬𠀠又難害▬不可害▬害亡不害▬𢀛亡不安▬善亡不𢦏▬周亡不同▬弗為不果▬弗惠𠬝▬𠀠又不可▬𠀠不可▬𢘓亡不[三号簡]

可▬習亡不果▬紉亡不述▬勿豫亡難▬弗為不成▬弗𡗜難▬𠀠事又難必▬不必▬必亡不必▬𢘓亡不達▬行亡不至▬欲亡不𡗜▬弗為不可▬[四号簡]

居不𨑨▬𠀠又不可智▬難智▬時亡不智▬思亡不𡨦▬忘亡不能▬舊亡不沾▬弗為不能▬弗思忘▬[五号簡途中]

釋文

[第一章][5]

畏天，智（知）。甬（用）身，足。審𤰈（觀）聖（聽），善出言，𢘓（慎）牆（將）乍（作），𢘓（強）心志。聖（聽）不聖（聽）𥘉（厭）𣃔，言牆（將）是之甬（用）。乍（作）不可𢘓（易）也，志不可𢘓（慢）也。

[5] 原文には章の区分は無い。議論の便のため、おおよそ陳民鎮・宋亞飛(2024)に従い分けたものである。

[第二章]

乍（作），逕（徑）囩（圓）也。不逕（徑）不囩（圓）。曲出者（諸）囩=（圓，圓）生頟=（銳，銳）生利。句（苟）誃（信）能備囩（圓），行利，𢆶（茲）[果]利，天下亡（無）㠯（以）𠬝（更）利。

[第三章]

青（靜），愆（慎）方也。不愆（慎）不方。直出者（諸）方=（方，方）生丏=（勉，勉）生灋。句（苟）訐（信）能備方，行丏（勉），𢆶（茲）果丏（勉），天下亡（無）以𠬝（更）丏（勉）。

[第四章]

𠀤（恆）又（有）難青（靜），不可青（靜）。青（靜），亡（無）不青（靜）。岕（止），亡（無）不安。善，亡（無）不𢦏（恬）。周，亡（無）不同。弗為，不果。弗惠，𠷎（亂）。

[第五章]

𠀤（恆）又（有）不可，𠀤（恆）不可。𢘓（強），亡（無）不可。習，亡（無）不果。紉（忍），亡（無）不述（遂）。勿豫（舍），亡（無）難。弗為，不成。弗𠦪（勉），難。

[第六章]

𠀤（恆）事又（有）難必，不必。必，亡（無）不必。𢘓（勤），亡（無）不達。行，亡（無）不至。欲，亡（無）不㝵（得）。弗為，不可。居，不逕〈逐〉（極）。

[第七章]

𠀤（恆）又（有）不可智（知），難智（知）。時（志），亡（無）不智（知）。思，亡（無）不宎（天）。忘（固），亡不能。舊（久），亡（無）不沾。弗為，不能。弗思，忘。

注釈

[第一章]

畏天，智（知）▬【1】，甬（用）身，足▬【2】。審𦞦（觀）聖（聽）▬【3】，善出言▬【4】。愆（慎）牆（將）乍（作）▬【5】，𢘓（強）心志▬【6】。聖（聽）不聖

（聽）砆（厭）旃【7】▬，言牆（將）是之甬（用）▬【8】，乍（作）不可𢘅（易）也▬【9】，志不可弛（慢）也【10】。

訓読：

天を畏れば知たり、身を用いば足る。觀聽を審（つつ）しみ、出言を善くし、將に作さんとするを慎しみ、心志を強くす。聽は厭を聽かざるなり、言は將に是れ之を用い、作は易う可らざるなり、志は慢（おこた）る可らざるなり。

現代日本語訳：
天を畏敬すると知(のある状態)となるが、自身の体を用いれば(それが)できる。見ることや聞くことに慎重になり、発言を適切にし、行うことに慎重になり、志を強くする。何かを聞くことについては、嫌悪(するような悪いこと)を聞かず、(それは)言葉にはその聞いたものが現れ(るからであり)、行なったことは変えられず、志は緩めてはならない。

【1】畏天，智（知）

[整理者]は「畏天」について「上天を畏敬する」こととし、『詩』我将「畏天之威，于時保之」および清華簡『命訓』「夫明王昭天信人以度功，功地以利之，使身=（信人）畏天，則度至于極。」を引く。

石小力(2023)は「畏天」および後文の「用身」が本篇の主題であるという。その上で「畏天」とは「上天を敬畏する」ということで、その早期の用例として大盂鼎に「畏天威」とあることを指摘する。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「知」が後文の「作」の重要な現れ、すなわち客観世界を認識することであるという。また[整理者]が「畏天知」と続けて読むのは適切ではなく、「知」は 「畏天」の結果(後文の「用身，足」も同様)であるという。

曹峰(2024)は『畏天用身』の「天」は人格神ではなく、また一切を主催し覆うといった意味合いはなく、人の力の外の、コントロール不可な要素を表しているという。そして人は天の作用に対して畏敬すべきである一方、その威厳の下に無条件に服従し何もしないのではなく、天と人との職分を認識し、人の主体性・積極性を発揮すべきと述べているという。

子居(2024)は「智」をそのまま「智」に読み、「智慧がある」とう意味を表す形容詞であるとし、「智」と「畏天」との関連について『孟子』梁惠王下「惟智者為能以小事大，故大王事獯鬻，句踐事吳。以大事小者，樂天者也；以小事大者，畏天者也。樂天者保天下，畏天者保其國。詩云：畏天之威，于時保之。」を引く。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【2】甬（用）身，足

石小力(2023)は「用身」とは「自身の主体性を発揮する」ということであるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「用身」という語が『墨子』貴義「今士之用身，不若商人之用一布之慎也」に見えるが、その含意は異なるという。すなわち、『畏天用身』の「用身」とは「人そのものの心理的機能と生理的機能を使用・発揮すること」であり、上述の石小力(2023)のいう「自身の主体性を発揮する」ことであるという。また「足」については「完成する」の意であるとし、『左伝』襄公二十五年「言以足志，文以足言」および杜預注「足，猶成也。」を引く。

子居(2024)は「足」が「満足」を表す形容詞であるとする。また「身」の書き方が清華簡『治政之道』と類似していることを指摘する。

按：石小力(2023)、陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。子居(2024)の指摘する通り「身  [6]」は清華簡『治政之道』「身  [7]」(24 号簡)と類似している。同様の「身」は「  [8]」(新蔡葛陵楚簡零 201)、「  [9]」(包山楚簡 226)のように他の楚簡にも見え、楚簡に多く見られるタイプの「身」(例えば  [10](包山楚簡 234))は、「  」の中心の点と最下部の横画が連続して書かれるようになったものと見做せる。楚簡の「身」が  [11](麩簋、西周晩期)のような字形に由来するとすると、本編のような「身」はやや古風な書き方を保持していると言える。

【3】審  （觀）聖（聽）

[整理者]は「審」は「詳盡(遺漏なく詳細を尽くす)」、「觀聖（聽）」は「見ることと聴くこと」の意であるとし、『韓非子』内儲説上「觀聽不參則誠不聞，聽有門戶則臣壅塞」を引く。

---

[6] 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊 93)。

[7] 清華大學出土文獻研究與保護中心編・黄德寬主編(2019:下冊 244)。

[8] 張新俊・張勝波(2008:156)。

[9] 李守奎・賈連翔・馬楠(2012:351)。

[10] 李守奎・賈連翔・馬楠(2012:351)。

[11] 董蓮池(2011:1136)。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「審」が「慎重である」の意であろうとし、『呂氏春秋』音律「審民所終」および高誘注「審，慎」を引く。また「觀聽」という語が『韓非子』において「内儲説上　七術」「内儲説下　六微」「八説」「八経」などの諸編にみられると指摘する。

曹峰(2024)は「審觀聽」および下の「善出言」は、統治者の言行が慎み深く合理的でなければならないことを指すという。その上で、整理者の引く『韓非子』の用例から見れば、「觀聽」は普通の見聞きすることではなく、特に統治者が臣下に対処する政治的行為を指し、そのため「審」でなければならないとし、『春秋繁露』天地之行「任賢使能，觀察四方，所以為明也」を引く。

子居(2024)は「審」は「察」の意味であるとし、『戦国策』魏策一「今君審於聲，臣恐君之聾於官也」鮑彪注「審，言聽之察」を引く。また「觀聽」という語が先秦の文献では『韓非子』にしか見えないことから、『畏天用身』と『韓非子』の年代は近いという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【4】善出言

[整理者]は「出言」が「話をする」意であるとし、『詩』都人士「其容不改，出言有章」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「善」は「妥当・適切」の意であるとし、『論語』雍也「閔子騫曰：善為我辭焉」を引く。

曹峰(2024)は上の「觀聽」同様、「出言」も普通の言葉ではなく政令を指すとし、『管子』形勢解「人主出言不逆於民心，不悖於理義，其所言足以安天下者也，人唯恐其不復言也」を引く。また「善」は「適切、慎む」の意味であるとし、類似した表現として『説苑』談叢「出言不當，四馬不能追也」、『文子』微明「舌者機也，出言不當，駟馬不追」を引く。

子居(2024)は『易』繫辞伝「子曰：君子居其室，出其言，善則千里之外應之，況其邇者乎。居其室，出其言不善，則千里之外違之，況其邇者乎。言出乎身，加乎民，行發乎邇，見乎遠。言行君子之樞機，樞機之發，榮辱之主也。」を引く。そして『畏天用身』が『繫辞』の影響を受けている可能性があり、『繫辞』が虚詞の「乎」を多用することからその成立が戦国後期より遡らないため、『畏天用身』も戦国後期以降の成立であるという。

按：[整理者] および陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。子居(2024)の引く『繫辞伝』は更に「言行，君子之所以動天地也，可不慎乎」と続く。子居(2024)による成立年代に関する議論はさておき、確かに『畏天用身』の文脈とは合致しそうである。

【5】  （慎）  （將）乍（作）

[整理者]は𢘓（慎）について「慎」の異体であるという。また「牆（將）乍（作）」については「行作」「作為」の意味であるとし、『商君書』墾令「聲服無通於百縣，則民行作不顧，休居不聽。休居不聽，則氣不淫；行作不顧，則意必壹。」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「將」を時間副詞であると解釈する。

子居(2024)は「牆（將）乍（作）」が秦官の「將作少府」と関連するのではないかとし、『漢書』百官公卿表「將作少府，秦官，掌治宮室，有兩丞、左右中候。景帝中六年更名將作大匠。」を引き、「制作」の意味ではないかという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【6】𢘓（強）心志

[整理者]は「心志」は「意志」の意であるとし、『墨子』非命中「是故昔者三代之暴王，不繆其耳目之淫，不慎其心志之辟」を引く。

子居(2024)は[整理者]の引く用例に加え、『墨子』修身「志不彊者智不達，言不信者行不果」を引き、『墨子』が『畏天用身』の作者に影響を与えたことがわかるという。また「心志」が『淮南子』に 4 例見えることから、『畏天用身』の年代は『淮南子』に比較的近いという。

按：[整理者]に従う。

【7】聖（聽）不聖（聽）𥘉（厭）𣃔

[整理者]は「𥘉」について、「石」「犬」に従う「厭」の省略体ではないかとし、『漢書』張延寿伝「厭海内之心」顔注「厭，滿也」を引く。また「𣃔」について、 吳振武(2006)に基づき、当該字が中山王器などに見られ「也」を表し、字形上は「㫃」に従い、「丹沙」(戈に付ける飾り)の「沙」の初文を声符とするという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「聽不聽」とは前文の「審觀聽」に対する補足であり、動詞目的語構造で「聴くべきでないこと(情報)を聴く」ことを表すという。根拠として本篇では「不×」という表現が多く見え、それが往々にして「不可×」を意味すること、後文の「不聞不可，聞不可敗」の「不聞不可」が「聴けない/聴くべきでない情報を聴かない」を意味することを挙げる。また「𥘉（厭）」については、「愛想をつかす、いやがる」の意であるとし、『論語』憲問「夫子時然後言，人不厭其言；樂然後笑，人不厭其笑；義然後取，人不厭其取。」を引く。またあるいは「抑制」と解釈できるかもしれないとして『左伝』昭公二十七年[12] 「將以厭眾」および杜預注「以厭眾心」を引く。

曹峰(2024)は「𥘉𣃔」とは、マイナスの、君主にとって有害なものを指すと見做す。そして「聖（聽）」は上文の「觀聽」を指すとし、「聖（聽）不聖（聽）𥘉𣃔」とは、「觀

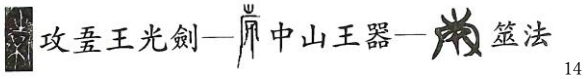
[12] 「二十六年」の誤りか。

聽」の際に「矿旆」に惹きつけられたり左右されたりしてはいけない、という意味であるという。

子居(2024)は、当該の「旆」が中山王器などに見られる字形とは大きく異なり、後文では「也」のみ見られることから、当該字は「旆」の訛ったものであると見做す。そして「矿旆」を「掩蔽」に読み、「不聽掩蔽」とは「一方的な言説に欺かれない」の意であるという。また「掩蔽」が『韓非子』『呂氏春秋』『礼記』月令に見えることから、『畏天用身』は戦国末期に成立したことが分かるという。

按：後文の「言牆（將）是之甬（用）」との対応から考えると、「聖（聽）」は一種の主題、「不聖（聽）矿（厭）」は「(否定詞＋)動詞＋目的語」という構造と考えられる。「矿（厭）」は曹峰(2024)のいうように何らかの「良くないこと」のように思われる。ここでは「嫌悪」のような意味に解釈しておく。

「旆  [13]」は[整理者]の述べる通り文末の語気詞であると考えられる。この字は中山王器の他、呉の攻吾王光剣や清華簡『筮法』などに見られるが、李守奎(2015a)(2015b)が述べているように、同一の文字であると見做せる。



[14]

なお、この「旆」は三晋(中原)地域に由来する可能性が高い[15]。

子居(2024)の「矿」を「掩」に読む説については、当該字が「厭」の省略体であるとするなら、両者の母音の差異から(前者は*-am、後者は*-em[16])通仮は想定し難いだろう。

【8】言牆（將）是之甬（用）

[整理者]は「言將用之」の倒置文であるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「言将用是」と同様であるとし、「是」は「聞こえた情報」を指すという。すなわち、耳に入った情報は言葉という形で口に出されるものであり、もし良くない情報を得たとすれば言葉によって表されてしまうということであるという。そして言うべきでないことを言わないのが「善出言」であるという。

---

[13] 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊 93)。

[14] 李守奎(2015b:340)。

[15] 宮島(2024)参照。

[16] 本稿の上古音の再構音は Schuessler(2009)による。

曹峰(2024)は「言」は前文の「出言」を指し、「出言」をした際にはそれに基づいて執行しなければならず、動揺してはいけないということであるという。また「是之」は「すでに発した政令」を指すという。

子居(2024)は[整理者]の倒置文という解釈には従えないとし、「是」は「正」「直」の意味であるという。また「是」の書き方が上博楚簡『子羔』と似ているとし、『畏天用身』が魯の文化的背景を有していることを示すという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。この一文は[整理者]らのいう通り、一種の目的語前置文であろう。類例として『孟子』離婁下「孟子曰：原泉混混，不舍晝夜。盈科而後進，放乎四海，有本者如是，是之取爾。」がある[17]。





「是[18]」について、上博楚簡『子羔』では「[19]」(12 号簡)のように作り、子居(2024)の指摘する通り確かに本篇と類似している[20]。こうした書き方の「是」はこの他、清華簡『筮法』、清華簡『子産』、清華簡『心是謂中』、清華簡『邦家之政』等にも見える。清華簡『筮法』『子産』が晋系文字の特徴を有した写本であるとの指摘[21]を勘案すれば、むしろ中原(三晋)との関連があるかもしれない。なお、三晋の貨幣には「[22]」のような「是」字が見える。



【9】乍（作）不可[illegible]（易）也

[整理者]は「[illegible]」について、「心」に従い「賜」を声符とすると見做し、「易」に読む。その上で「軽視」の意味であるとし、『左伝』僖公二十二年「國無小，不可易也」を引く。

---

[17] 松江(2023:88)参照。

[18] 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊 93)。

[19] 饒宗頤(2012:451)。



[20] なお、本篇では 8 号簡のみ「[illegible]」(清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編 2023:上冊 96)に作る。

[21] 趙平安(2016)、李守奎(2015b)参照。

[22] 湯志彪(2013:207)。

曹峰(2024)は「作」が前文の「牆（將）乍（作）」を指すという。そして「乍（作）不可  （易）也」とは、「行為は軽々しく変えられない」という意味であるという。

子居(2024)はこの「」が前文の「慎」の反義語であるはずであること、また 14 号簡「不疑」、16-17 号簡「明者亡」の「」は「軽視」と解釈することができないとし[整理者]の見解を退ける。そして「明珍」氏の見解[23]に従い、「軽率」の意味であるとする。

按：曹峰(2024)に従う。

【10】志不可  （慢）也

[整理者]は「  [24]」について、「」と隷定し「溺」に読み、「志をその中に惑溺させる」の意であるとして『礼記』楽記「鄭音好濫淫志，宋音燕女〈安〉溺志」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)はインターネット上の見解[25]に従い、[整理者]が「  」と隷定する字は「弓」に従い「娩」声の、「挽弓(弓を弾く)」の「挽」字であるという。同形字は清華簡『筮法』50 号簡に見え、そこでは「娩」に読まれることを指摘しつつ(李守奎 2015b の見解を引用)、ここでは「慢」に読む。そして『説文』「慢，惰也」を引き、「作不可易也」の「易」が「慎将作」の「慎」の反対であったのと同様に、「慢」は前文「強心志」の「强」の反対の意味であるとする。また、「聽不聽，厭也，言將是之用。作不可易也，志不可慢也。」と「審觀聽，善出言。慎將作，強心志。」が逐一対応しているという。

曹峰(2024)は「志」は前文の「心志」を指すという。また「  」を[整理者]と同様に「  」と隷定するが、「弱」に読む[26]。そして「志」の「強弱」についての記述として『淮南子』主術「夫人主之聽治也，清明而不暗，虚心而弱志。是故群臣輻湊並進，無愚智

[23] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 18 楼、2023 年 12 月 14 日

[24] 清華大學出土文獻研究與保護中心編・黃德寬主編(2023:上冊 93)。

[25] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 20 楼、2023 年 12 月 19 日。

[26] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 1 楼、2023 年 11 月 20 日がすでにこの見解を述べているという。

賢不肖，莫不盡其能。」、『老子』「強行者有志」を引く。そして「志不可（弱）也」は「意思を揺るがせない」という意味であるという。

子居(2024)は「  」は「弓」「包」に従う字であり、「勼」の異体ではないかという。そして「勺」と「弱」は通じるとし、「弱」に読む。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)らの指摘する通り、「  」は清華簡『筮法』50 号簡の「  [27]」と同じ字であろう。当該字右部は「分娩」の「娩(/孕)」の初文(後文の「」と同じ由来、上博楚簡『姑成家父』3 号簡では「  [28]」に作る)であると考えられる[29]。ここでは陳民鎮・宋亞飛(2024)に従い「慢」に読み(「娩」(*mân?/*mran?)、「慢」(*mrâns)ともに元部)、「おこたる、ゆるめる」のような意味に解釈する。

[第二章]

乍（作），逕（徑）囝（圓）【1】也▃。不逕（徑）不[一号簡]囝（圓）▃【2】。曲【3】出者（諸）【4】囝=（圓，圓）生  =（銳，銳）【5】生利【6】▃。句（苟）誧（信）能備囝（圓）【7】▃，行利，幺（茲）［果］利▃【8】，天下亡（無）目（以）  （更）【9】利。

訓読：

作は、く圓きなり。徑からざれば圓からざるなり。曲は圓より出で、圓は銳を生じ、銳は利を生ず。苟しくも信に能く圓を備え、利を行い、利を果たさめば、天下に以て利を更う無し。

[27] 清華大學出土文獻研究與保護中心編・李學勤主編(2013:上冊 45)。

[28] 馬承源(2005:71)。

[29] 李零(2002:137)参照。なお、清華簡『筮法』では「  」は「産育」のような意味合いの語を表していると思われ、清華簡『筮法』の整理者は「字」に読んでいる。

現代日本語訳：

「作(動き)」は、「径(すみやか)」であり「円(まるい)」でもある。「径」でなければ「円」とならない。「曲」(融通・しなやかさ？)は「円」から生み出され、「円」は「鋭」(速さ？)を生じさせ、「鋭」は「利」(物事を障害なく行えること？)を生じさせる。もし本当に「円」(の性質)を備えることができ、「利」を行い、「利」を完成させることができれば、天下にその「利」を改めるものは無くなる。

【1】乍（作），逕（徑）囝（圓）也
[整理者]は「逕」を「徑」に読み、「直」の意であるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「作」について、『爾雅』釈言「為也」を引きつつ、「動」と意味が近いとして『爾雅』釈詁「動，作也」を引く。「逕（徑）」は「まっすぐ、直接」という意味であり、後文の「利」とも意味上の関連があるという。「囝（圓）」については、円を描くのと方形を描くのにはそれぞれコンパス(「規」)と定規(「矩」)が必要であり、『荘子』馬蹄・『荀子』賦などで「圓者中規，方者中矩」と記されていると指摘する。そして『呂氏春秋』季春紀「天道圜，地道方」、『荘子』天道「其動也天，其靜也地」、『荘子』天運「天其運乎？地其處乎？」、『管子』君臣下「圓者運，運者通，通者知」を引きつつ、「圓」と天が関連し(「天圓地方」)、天は「動」の特質を付与され、天は運行し地は静止しているというのが古人の普遍的観念であり、「天」も「圓」も運行しうるものであると考えられていたという。

劉子珍(2024)は「圓」とは、法則(後文の「方」)を守るという前提のもとで、それに固執することなく、現実の複雑な状況に応じて柔軟に素早く問題を解決することを指すという。

子居(2024)は「作」が後文(第三章)の「静」と相反するとし、『管子』勢「夫靜與作，時以為主人，時以為客，貴得度。」等を引く。「逕」は「経」に読み、「経」には「天道法度」の意味があるとし、『漢書』司馬遷伝「夫春生夏長，秋收冬臧，此天道之大經也」顔師古注「経，常法也」を引く。また「圓」は「天道」を指すとし、「乍（作）逕（経）囝（圓）也」の「作経」とは「作法」のようなものであるとして『商君書』更法「知者作法，而愚者制焉」を引く。

按：「作」は子居(2024)の指摘する通り、「静」に対応し、何らかの主体的な「動き」や「行い」と考えられる[30]。「逕（徑）」について、第三章の「愼（慎）」との対応に鑑みて、「早い、速やか」の意と解釈する。

【2】不逕（徑）不囷（圓）

子居(2024)は「法度が無ければ円道を成さない」という意味を表すとし、『国語』周語下「經之以天，緯之以地」韋昭注「以天之六氣為經，以地之五行為緯，而成之也。」を引く。

【3】曲

劉子珍(2024)は後文の「直」に対するものであり、遠回しで婉曲、融通をきかすことを知らなければならないということを指すという。

【4】者（諸）

子居(2024)は当該字が上博楚簡『性情論』と似ており、魯文化の影響によるものであるという。

按：本篇の「者  [31]」は確かに上博楚簡『性情論』の「者  [32]」(2 号簡)と似ている。しかし、同様の書き方の「者」は例えば上博楚簡『柬大王泊旱』にも見え( [33])、「者」の字形に関して魯との関連性が認められるかどうかは疑問である。「諸」は「之于/於」の融合したものであるが、「于/於」に相当すると思しき例も存在する(例えば『礼記』祭義「孝弟發諸朝廷，行乎道路，至乎州、巷，放乎獀狩，脩乎軍旅，眾以義死之而弗敢犯也。」)。

【5】  （鋭）

[30] 上記研究班における宮宅潔氏のご指摘による。

[31] 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊 93)。

[32] 饒宗頤(2012:614)。

[33] 饒宗頤(2012:618)。

[整理者]は「尒」声であるとし「鋭」に読み、『老子』「挫其鋭」の「鋭」を郭店楚簡『老子』甲組が「  」に作ることを指摘する。

陳民鎮・宋亞飛(2024)はここでの「鋭」は「急速」の意味であるとし、『孟子』尽心上「其進鋭者，其退速」を引く。

曹峰(2024)はここでいう「鋭」や下の「利」とは、利益の最大化を形容するものであるという。

子居(2024)は「睿」に読み、「明智」の意味であるという。そして『文子』微明「智圓者，終始無端，方流四遠，淵泉而不竭也。行方者，直立而不撓，素白而不汙，窮不易操，達不肆志也。…智圓者，無不知也；行方者，有不為也。」を引く。「睿生利」であれば理解がしやすいとし、『文子』上礼「各以其智去其所害，就其所利。」等を引く。

劉子珍(2024)は、前文の「圓」には角がなく、「鋭」には角があることから、「相反相成」「対立転化」の関係であるという。そしてその「鋭さ」があればこそ人に利用されるのだという。

按：[整理者]に従い「鋭」に読む。意味については陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【6】利

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「順調、滞りがない」の意味であるという。

劉子珍(2024)は、「圓生鋭，鋭生利」とは、人の活動においては、柔軟性があってこそ契機を探すことができ、問題を解決できる、ということであるという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【7】句（苟）誖（信）能備囩（圓）

子居(2024)は「信」は「誠」の意味であるとする。また「信能」が先秦の文献では『管子』四時「信能行之，五穀蕃息，六畜殖」、『孟子』公孫丑上「信能行此五者，則鄰國之民仰之若父母矣」に見えることから、『畏天用身』の成立は戦国後期・末期を出ないという。また「備」を[整理者]は「服」に読むが、それでは理解し難いとして「備」に読み、「備わる」の意味であるという。「苟信能備圓」とは「もし自分が本当に円道を備えることができるならば」という意味であるという。

按：「備」について、ここでは子居(2024)にしたがい「備」に読む。楚簡の通例では「備」は「服」を表すが、「備」を表す例に清華簡『越公其事』44 号簡「雩（越）邦備訐(信)，王乃好陞(徵)人」[34]等がある。なお、中山王  鼎には「呉人并雩（越），雩

[34] この「備」を「備」に読むこと自体は子居「清华简七《越公其事》第六章解析」(中国先秦史、http://www.xianqin.tk/2018/07/06/657/ 、2018 年 7 月 6 日)および子居「清华简七《越公其事》第七、第八章解析」(中国先秦史 http://www.xianqin.tk/2018/08/04/663/、2018 年 8 月 4 日)にて指摘されているが、子居氏は「皆」の意味であると解釈している。

（越）𨚕（修）𢦏（教）備恁（信），五年遻（覆）吳，克并之至于今」[35]とあり、清華簡『越公其事』と同じ文脈で「備」が用いられている。清華簡『越公其事』の文字や用字には晋系の要素が見られること[36]、中山国の文字が晋系に分類されることなどを勘案すると、「備」が「備」を表すのも三晋(中原)地域との関連性を示すものかもしれない。

【8】幺（茲）[果]利

[整理者]は 2 号簡末の「幺（茲）果丐（勉）」に基づき、「幺（茲）」の後に「果」を書き漏らしたのではないかという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は石小力(2017)を引きつつ「幺（茲）」を「使」に読み、使役を表すという。

子居(2024)は「果」の有無は文意に影響しないという。そして「茲」について、『助字辨略』「此，是也，茲也，彼之對也。…《大學》“有德此有人，有人此有土，有土此有財，有財此有用。”《後漢書・黃瓊傳》“自生民以來，善政少而亂俗多，必待堯舜之君，此為志士終無時矣。”諸此字，猶云斯也、乃也。」を引き、「茲利」とは「乃利」であるという。

按：[整理者] にしたがい、「果」を補う。また陳民鎮・宋亞飛(2024)に従い、「幺（茲）」は使役を表すマーカーであると解釈する。石小力(2017)が指摘している通り、文献中には使役を表す「幺（茲）」が存在する。石小力(2017)は出土文献における用例として、清華簡『子産』『越公其事』『祝辞』の用例を挙げている。上述した清華簡『子産』『越公其事』の他、清華簡『祝辞』も晋系文字の特徴を有していることが知られており[37]、このことから推測すれば、使役を表す「幺（茲）」も三晋(中原)地域との関連性が推測される。

【9】𣪊（更）

[整理者]は、「𣪊」は「攺」声の「梗」の異体字であるとし、「更」に読み「さらに」の意味であるという。

子居(2024)は先秦文献の「更」には「さらに」の意味はないという。そしてここでは「改」の意味であるとする。「天下無以更利」とは「天下もこの収益を改めることはできない」という意味であるという。

按：子居(2024)に従い、「更」は「変更する、あらためる」の意味に解釈する。

［第三章］

35 釈文は馬承源(1988)参照。

36 羅雲君(2018:147-148)。

37 劉剛(2014)、福田(2016)参照。

青（靜），愼（慎）方也【1】。不愼（慎）不方▬。直出者（諸）方=（方，方）生丐〈灋〉=（勉〈灋〉，勉〈灋〉）生灋〈丐〉（勉）▬【2】。句（苟）訐（信）能備方▬，行丐（勉）▬，玆（茲）果丐（勉）▬[二号簡]，天下亡（無）以㮚（更）丐（勉）▬。

訓読
靜、慎にして方たるなり、慎しまざれば方たらず。直は方より出で、方は灋を生じ、灋は勉を生ず。苟しくも信に能く方を備え、勉を行い、勉を果たさ茲めば、天下に以て勉を更う無し。

現代日本語訳：
「静(動かない、安定した状態でいる)」は、「慎(無闇に動かない)」であり「方(四角い)」であるということだ。「慎」でなければ「方」ではない。「直」は「方」から生み出され、「方」は「法」(手本・規範)を生じさせ、「法」は「勉」(力を尽くし励むこと)を生じさせる。もし本当に「方」(の性質)を備え、「勉」を行い、その「勉」を完成させることができれば、天下にその「勉」を変えるものは無くなる。

【1】青（靜），愼（慎）方也
[整理者]は「青」を「靜」に読み、「作」と対になるという。また「愼」を「慎」に読み、「慎」と「靜」は意味が近いとして『荀子』解蔽「人何以知道？曰：心。心何以知？曰：虚壹而靜。」を引く。一説として、「愼」を「軫」に読み、輿の下の四面の横木であるとし、『周礼』考工記・輈人「軫之方也，以象地也。」を引く。
程浩(2023)は「愼」およびその異体字が楚簡では「慎」に読まれるのが通例であるとしつつも、ここでは「軫」に読む。車底の四面の木を「軫」と呼び、古代の車の車台の多くは方形であるため、「軫」は「方」義を派生したとし、『楚辞』「軫石崴巍」王逸注「軫，方也」を引く。また「軫」が「方」義を表す際、「方」と共に用いられるという。そして本篇の「作，徑圓也，不徑不圓」「靜，軫方也，不軫不方」はおおよそ「積極的行為は径円のようであり、径がなければ円を成さない。虚静無為は軫方のようであり、軫がなければ方を成さない」と訳せるという。
曹峰(2024)は程浩(2023)に従い「愼」を「軫」に読む。
陳民鎮・宋亞飛(2024)は楚簡あるいは本篇の用字習慣から見ても、「愼」は「慎」に読む他ないとする。また「慎」と「靜」を関連づける用例として『礼記』儒行「慎靜而尚寬」を引く。そして当該の「慎」と第二章の「徑」が対応し、それぞれ「慎重」「直接」を表し、「不徑不圓」「不愼（慎）不方」ともに累加関係を表すという。「愼」を「軫」に読む説については、当該部分の「方」は「愼」の結果であるから、「愼」も「方」の意

味では累加関係が見えなくなってしまうこと、また「軫」の「方」の意味は引申義でありなおかつ常用ではないこと、また二十八宿の「軫」は「車之象」を表すが、清華簡『五紀』にまさに「軫」と書く用例があることを指摘し退ける。

子居(2024)は「静」に読む「寍」は郭店楚簡『性自命出』『語叢四』・上博楚簡『性情論』に見えることから、魯文化の特徴を有したものであるという。また『礼記』儒行「慎靜而尚寬，強毅以與人」とあることから、「慎」「静」を並称することは魯文化の特徴であり、『畏天用身』の作者が魯人の可能性が高いという。

劉子珍(2024)も「慎」に読み、「静にして為さず」であるためには、方形を描くように慎重である必要がある、ということであるという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)の言うとおり、「  」はこれまでの用例から見ても「慎」に読むのは問題ない[38]。一方「軫」は章母文部(*tənʔ)であり、「」が「慎」(禪母真部*dins)に近い字音であったならば、通仮は想定し難いと思われる。

【2】直出者（諸）方=（方，方）生丐=（勉，勉）生灋▬

[整理者]は原文の「丐=生灋」の「丐」と「灋」の位置を取り替えるべき、すなわち「灋=（灋，灋）生丐」とすべきではないかという。また「方生灋」は『管子』軽重己「清神生心，心生規，規生矩，矩生方，方生正，正生暦，暦生四時，四時生萬物」と意味が近いという。「丐」は「勉」に読み、「はげます」の意味であるとする。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は[整理者]同様「丐」を「勉」に読むが、「努力する、尽力する」の意味に解釈し、『論語』子罕「喪事不敢不勉」の皇侃疏「勉，强也」を引く。その上で「勉」は努力し、困難を克服し完成させることを強調する一方、「利」は順調で支障のないことを言い、両者が対になっているという。また規(コンパス)を使って円を描くのが容易に行えるのと異なり、矩(定規)によって四角を描くのは詳細に手まねをする必要があるため、このようなことを述べているという。そして『礼記』中庸「或安而行之，或利而行之，或勉強而行之，及其成功，一也」を引き、『畏天用身』同様に「利」と「勉」が対比されていると指摘する。

子居(2024)は「丐」を「緺」あるいは「綸」に読み、「縄」の意味に解釈する。「方生縄」の観念は『淮南子』天文「中央土也，其帝黄帝，其佐後土，執繩而制四方」、『漢書』「權與物鈞而生衡，衡運生規，規圜生矩，矩方生繩，繩直生準，準正則平衡而鈞權矣。是為五則」と関連するという。また「灋」の書き方が清華簡『四告』の「灋」と似ており、子居氏によれば『四告』の作者は春秋時代の魯人であることから、魯地の書き方であろうという。

[38] 陳剣(2007)参照。陳剣(2007)によれば当該字は「所(質)」声。

劉子珍(2024)はこの一文を「直線は方形に由来し、方形はまた倣うべき規範を生み出し、それによって人を盲目的に物事を行わないようにし、自覚的に有為たるよう励ます」と解釈する。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。なお、楚簡では後文に見えるように「𡗗」で「勉」を表すのが通例である[39]。

[第四章]

𠀠（恆）又（有）難【1】𡨦（靜）▬，不可𡨦（靜）▬【2】。𡨦（靜），亡（無）不𡨦（靜）【3】▬。𡴀（止），亡（無）不安【4】▬。善，亡（無）不𢦏（恬）【5】▬。周，亡（無）不同▬。弗為，不果▬。弗惠，𤔔（亂）▬【6】。【7】

訓読：

恆に靜たり難き有りて、靜たる可らず。靜たれば、静たらざる無し。止(とど)まれば、安からざる無し。善なれば、恬(やす)からざる無し。周ねくすれば、同じからざる無し。為さざれば、果たさず。惠まざれば、亂る。

現代日本語訳：

「静」であるのが難しいのが常であり、「静」とすることができなくなってしまう。(しかし)「静」であれば、「静」でないことはない。止まっていれば、安定しないということはない。正しければ、安寧でないということはない。全てに広く行き渡るようにすれば、同じでないということはない。(これらを)為さなければ、成し遂げることはできない。愛しまなければ、秩序がなくなる。

【1】難

子居(2024)は上博楚簡『孔子詩論』の書き方と似ているとし、これも『畏天用身』が魯の文化的背景を有していることを示すという。

按：本篇の「難  [40]」に対し、上博楚簡『孔子詩論』の「難」は  [41](3号簡)のように書かれる。

---

[39] 禤健聰(2017:218-219)参照。

[40] 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊94)。

[41] 馬承源(2001:15)。

【2】亟（恆）又（有）難靑（靜）▬，不可靑（靜）▬

子居(2024)は、[整理者]の「亟（恆）又（有）難靑（靜），不可靑（靜）」という釈文について、後文の「恆事有難必、不必」同様、「、」とすべき(＝並列の関係とみなすべき)という“ee”[42]の見解に賛同し、「恆有難靜、不可靜」とは「つねに運動してやまない状況がある」ということであるという。

駱珍伊(2023)は後文(5 号簡)の「恆民有命，無不死」、「恆民無命，靜必沒」という形式から、また第七章の「時，無不知」の「無不知」が「時」の結果であること、第五章の「恆有不可，恆不可」の「，」前後は並列とは考えられないことなどから、「恆有 A，B」あるいは「恆 A，B」の B は A を補足するものであるという。「恆」あるいは「恆有」は「常に」「普通は～がある」という意味で、その後の句は本篇の作者が通常ありうると考える「常例」であるという。そしてその後の一文で反例を挙げ、「常例」と正反対の状況、あるいはある特定の動作行為のもとでの常例と正反対ないし相対する結果(「反例」)を提示しているという。さらに「積極的行為」と「消極的行為」の二方面から、事情あるいは状況の正反二つの方向への発展を述べているという。駱珍伊(2023)は第四～七章の内容を下表のようにまとめる。

	恆有——常例	反例	積極作為	消極作為
第 1 組	難靜，不可靜	靜，無不靜	羿，無不安 善，無不恬 周，無不同	弗爲，不果 弗惠，亂
第 2 組	不可，恆不可	强，無不可	習，無不果 紉，無不遂 勿舍，無難	弗爲，不成 弗勉，難
第 3 組	事有難必，不必	必，無不必	懂，無不達 行，無不至 欲，無不得	弗爲，不可 居，不遁
第 4 組	不可知，難知	時，無不知	思，無不天 恿，無不能 久，無不沾	弗爲，不能 弗思，荒

すなわち、本篇ではまず万事・万物には「恆例」があるが、人が何らかの行為で変化すれば、「恆例」の方向を変えうるということを述べているという。また積極的な行為によってそれに応じたプラスの方向の成果が得られるが、反対にもし何も行わなければ、いかなる成果も得られないこと、また消極的な行為は、マイナスの影響とよくない代価をもたらすことを述べているという。なお、「恆有難靜，不可靜」とは、「静まることが難しい状況が常にあり」、そうした状況下では、その結果は「静まることができない」であるとい

[42] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 8 楼、2023 年 12 月 12 日。

うことであるという。すなわち、「難靜，不可靜」は因果関係で、「不可靜」は「難靜」の結果を補足説明しているという。

按：駱珍伊(2023)に従う。

【3】青（靜），亡（無）不青（靜）

陳民鎮・宋亞飛(2024)は第四～七章の「恆」で始まる 4 つの部分について二種類の解釈の方向性があるとする。その一つは例えば「靜無不靜」を「靜，無不靜」、すなわち「静を行おうとすれば、静とならないものはない」と解釈し、「弗為不果」を「弗為，不果」即ち「もし行わなければ、実現しない」と解釈するものである。もう一つは、「靜無不靜」を「静となれないことはない事物を静かにする」と解釈し、「弗為不果」を「実現できないことを行わない」と解釈するものである。その上で、後者を採用すべきとする。

子居(2024)は「靜無不靜」および後文の「持無不安」「善無不恬」「周無不同」を合わせて見ると、明確な道家の特徴があるという。またこれらは「恆有難靜不可靜」に対応するもので、静によって動を制するという観念を持ち、「靜無不靜」の一つ目の「靜」は絶対的な静止を言っているのではなく、冷静に向き合い変化を認識することを言っているのであるという。

駱珍伊(2023)は、この一文は前文の「難靜」と相反し、「もし静まることができれば、静まらないものはない」という意味であるという。そしてこれ以下の文は積極的な行為から「靜，無不靜」の三つの状況を説明しているという。

按：駱珍伊(2023)に従う。

【4】𡍮（止），亡（無）不安▃。

[整理者]は「𡍮」を「廾」に従い「之」声の「置」の異体字であるとし、清華簡『子犯子餘』にも見えるという。ここでは「時」に読み、「時宜に叶う」の意味であるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は單育辰氏の見解[43]を引きつつ、「𡍮」を「止」に読む。

子居(2024)は先秦文献において「持」と「安」が共に挙げられる例があるとして、『荀子』王覇「得道以持之，則大安也」等を引き、「𡍮」は「持」に読む可能性が高いという。

駱珍伊(2023)は「𡍮」を「時」に読む説については、後文の「善」「周」「惠」と合致し、ともに「適切な行動」を表しているという。一方「止」に読み「静止」の意味に解釈

[43] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 2 楼、2023 年 12 月 11 日。

する説については、それによって得られる結果である「安」と対応するとし、どちらの説も良いとする。

按：駱珍伊(2023)がすでに指摘しているが、「  」を(甲骨文の)「置」と結びつけるのは趙平安氏の見解[44]によるものと思われる。清華簡『子犯子餘』の用例は「胡晉邦有禍，公子不能焉，而走去之」(1-2 号簡)であるが、小寺(2017:288)によれば「止」以外に「侍」「持」などに読む説もある。ここでは「止」に読んでおく。

【5】  （恬）

[整理者]は「恬」の異体字であるとし、『説文』「安也」を引く。

按：[整理者]に従う。

【6】弗為不果▃，弗惠  （亂）▃

子居(2024)は「何かをなさなければ成果がない」という考え方は、道家のなかでも斉道家の特徴であるという。また「恵」は「順」の意味であるいう。

駱珍伊(2023)は行動を起こさなければ、「靜」という結果が得られないこと、また「弗惠」であれば、「亂」という結果ももたらしうるということを述べているという。

按：駱珍伊(2023)に従う。

【7】  （恬）又（有）難青（靜）…弗惠（亂）

子居(2024)は「不恬」「無不靜」が『莊子』に、「無不安」が『鶡冠子』『呂氏春秋』に、「無不同」が『管子』『呂氏春秋』に見えることから、『畏天用身』の成立は戦国末期であろうという。

[第五章]

（恬）又（有）不可▃，（恬）不可【1】▃。  （強），亡（無）不[三号簡]可【2】▃。習，亡（無）不果▃【3】。紉（忍），亡（無）不述（遂）【4】▃。勿豫（舍），亡（無）難【5】▃。弗為，不成▃。弗  （勉），難▃【6】。

訓読：

恬に可ならざる有り、恬に可ならず。強ければ可ならざる無し。習(かさ)ねれば果たさざる無し。忍べば遂げざる無し。舍く勿からば、難きは無し。為さざれば成らず。勉めざれば難し。

44 趙平安(2017:140-141)。

現代日本語訳：
できないということは常にあり、永遠にできなくなってしまう。(しかし)力を尽くせばできないことはない。何度も繰り返せば、成し遂げられないことはない。辛抱すれば、実現しないことはない。(何かを)やめてしまわなければ、難しいということはない。(これらを)為さなければ、実現しない。(これらを)努力しなければ、(実現は)難しい。

【1】死（恆）又（有）不可▬，死（恆）不可
　駱珍伊(2023)は「恆不可」は「不可」の補足説明であり、「できない事や状況が常にあり」、こうした事情や状況の結果は往々にして「永遠にできない」である、ということを述べているという。
　按：駱珍伊(2023)に従う。

【2】强（強）亡（無）不可
　陳民鎮・宋亞飛(2024)は「强(強)」を「尽力、勤勉」の意味に解釈する。
　駱珍伊(2023)は、もし十分に「強」であれば、「成せないことや状況はない」という意味であるという。また陳剣氏の説(私信)として、この「強」は「無理をする(勉強)」の意であり、おおよそ「尽力して行う」といった意味であること、後文の「習」「忍/靭」「勿舍」はどれも「強」の一部分/方面/階段/過程であろう、という。
　按：陳民鎮・宋亞飛(2024)、駱珍伊(2023)に従う。

【3】習，亡（無）不果▬。
　陳民鎮・宋亞飛(2024)は、「習」は「何度も、重ねて」の意味であるという。一方、「作為」の意味とも理解できるとして『周易』坤「直方大，不習無不利」王弼注「任其自然，而物自生;不假修營，而功自成，故「不習」焉，　而「无不利」」を引く。
　按：陳民鎮・宋亞飛(2024)の前者の解釈に従う。

【4】紉（忍），亡（無）不述（遂）
　[整理者]は「忉」に読み、『詩』霊台「王在靈沼，於忉魚躍」毛伝「忉，滿也」を引く。
　駱珍伊(2023)は「靭」「忍」「紉」「刃」に読む説[45]を引く。そして後の「習，無不果」が習熟すれば成せないことはないということを表し、また「勿舍，無難」が途中で諦めずにやり続ければ、成し難いことはないという意味を表しているとした上で、どちらも「意志が固い」こと、すなわち「何度も絶えず」「堅持し投げ出さずに」行うことを強調

[45] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 2 樓、第 3 樓、第 4 樓、第 5 樓、第 6 樓、2023 年 12 月 11・12 日。

していることから、「紉」は「忍」あるいは「韌」に読むのが良いという。ただし、後の「習」「舍」が動詞であることから、「忍」に読むのがより適当であろうという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「韌」に読む説に従う。文献中では「肕」「紉」「忉」「仞」等にも作るとし、『管子』心術下「人能正静者，筋肕而骨强」を引く。

子居(2024)は「紉」に読む説に従う。また「無不遂」が『国語』に見えることから、『畏天用身』の成立は戦国後期に近いという。

按：駱珍伊(2023)に従い、「忍」に読む。

【5】勿豫（舍），亡（無）難

[整理者]は「豫」を「舍」に読み、「停止」の意味であるとして『荀子』勧学「鍥而舍之，朽木不折；鍥而不舍，金石可鏤」を引く。

子居(2024)は「勿舍」が『管子』や、馬王堆帛書『戦国縦横家書』の「謂齊王曰…」という箇所に見えるため、『畏天用身』のが斉文化の影響を受けていることは明らかであり、成書は戦国後期・末期を出ることはないという。

按：[整理者]に従う。

【6】弗為不成▬。弗孚（勉）難▬。

[整理者]は『荀子』脩身「道雖邇，不行不至；事雖小，不為不成」を引く。「孚」は「尃」の本字であるとして「勉」に読み、『史記』殷本紀「捨而弗勉，何以成德」を引く。

子居(2024)は「為さなければ成功はない」という観念について、嶽麓秦簡『為吏治官及黔首』にも「事無細，弗為不成」とあることを指摘する。そして『荀子』脩身と『為吏治官及黔首』の用例から、『畏天用身』の成立は戦国末期である可能性が最も高いという。また「弗孚（勉）難」は「弗孚（勉）難成」の省略であるという。

駱珍伊(2023)は「一生懸命行わなければ、「難」という結果を招きうる」ということを表すという。

按：[整理者]に従う。

［第六章］

丞（恆）事又（有）難必▬，不必【1】▬。必，亡（無）不必【2】▬。悳（勤），亡（無）不達【3】▬。行，亡（無）不至▬。欲【4】，亡（無）不旻（得）▬。弗為，不可▬。[四号簡]居，不逐〈逐〉（極）【5】▬。

訓読：
恆に事には必すること難き有り、必せず。必せば、必せざる無し。勤めば、達せざる無し。行かば、至らざる無し。欲すれば、得ざる無し。為さざれば、可ならず。居れば、極(いた)らず。

日本語訳：
ものごとは決行するのが難しい(という性質を持っている)のが常であり、必ずは行われなくなってしまう。(しかし)決行すれば、行われないということはない。力を尽くせば、到達しないことはない。行けば、至らないということはない。欲しいと思えば、得られないということはない。(これらを)行わなければ、できない。とどまってい(て行動しなけ)れば、到達できない。

【1】丞（恆）事又（有）難必▃，不必▃。
[整理者]は「必」について、「肯定する」の意味であるとし『韓非子』顕学「無参験而必之者，愚也」を引く。
陳民鎮・宋亞飛(2024)は「恆事」とは「通常の事」であるとし、『左伝』荘公二十四年「親迎，恆事也，不志」を引く。また「必」は「畢」に読む可能性もあるとする。
子居(2024)は、「難必」が『呂氏春秋』不広「公子糾外物則固難必。雖然，管子之慮近之矣。」に見えることを指摘し、『畏天用身』が戦国末期に成立したと考えられるという。
駱珍伊(2023)は「一般的な事情には確定/把握するのが難しい情況があり」、そのような状況の結果は「不確定/把握できない」である、ということであるという。
按：「必」は「必ず(何かを)行う、決行する」という意味に解釈しておく。「丞（恆）事」について、「丞（恆）」は文全体にかかる副詞と見做す。

【2】必，亡（無）不必▃。
子居(2024)は「必無不必」とは、行為において必然性を確固として追い求めれば、不必然的な局面は現れない、ということを述べているという。
駱珍伊(2023)は、もし「保証/把握」できれば、「保証/把握できないものはない」という意味であるという。後文で良い結果を出すものとしてとして「達」「至」「得」が挙げられていることから、「必」の意味は「ある事を成しとけられる保証ができる/自信がある」という意味であるという。

【3】憙（勤），亡（無）不達▃

[整理者]は「蕙」を「謹」に読む。「達」は「到達」の意味であるとし、『論語』子張「欲速者不達」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は、郭店楚簡『緇衣』に見える「蕙」が「謹」に読まれることを指摘する。しかしここでは「達」とうまく対応しないため、「勤」に読み「尽力する」という意味ではないかという。

子居(2024)は「蕙」について、「黄」と「心」に従う字であり「往」に読むとする説[46]に賛同する。また「無不達」が『淮南子』『説苑』に見えることから、『畏天用身』の成立が戦国末期であることがわかるという。

駱珍伊(2023)は後文の「行」「欲」が「行動」「追い求める」という積極的な行為であることから、「蕙」は「勤」に読み、「尽力する」の意味であるという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)、駱珍伊(2023)に従い「蕙」を「勤」に読む。

【4】欲

[整理者]は「好む」の意味であるとし、『左伝』成公二年「余雖欲於鞏伯，其敢廢舊典以忝叔父」、王引之『経義述聞』「欲，猶好也」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「欲しい」の意味であるという。

按：陳民鎮・宋亞飛(2024)に従う。

【5】弗為，不可▬，居，不⿺辶丞〈⿺辶亟〉（極）▬

[整理者]は『易』恆「九三：不恆其德，或承之羞，貞吝」を引く。

駱珍伊(2023)は、行動しなければ「必」という結果が得られず、「不⿺辶丞」という結果をも招きうるという意味であるという。「居」については「居止」「止息」の意味であるという。「⿺辶丞」について、[整理者]は「恆」に読むが、本篇では「恆」に読む字はみな「⿱丞止」に作り、文意も合わないとする。その上で「⿱丞止〈亟〉」声であると見做して「極」に読み、「不極」とは「不達、不至」の意味であるという。「亟」が誤って「⿱丞止」と書かれたと思しき例として、清華簡『治政之道』26 号簡「亓（其）所訇（招）則 ⿺辶丞（極），所求則旻（得）」およびその整理者の「⿺辶丞，「極」之訛字。《詩・綿蠻》「豈敢憚行，畏不能極」鄭箋：「極，至也。」」を引く。そして本篇の「居，不極」は「止まって行なわなければ、諸事は皆いたることはない」という意味であるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「居」について、「停止」の意味であるという。「⿺辶丞」については駱珍伊(2023)に従う。

子居(2024)は、「弗為不可」は前文の「必」「往」「行」「欲」を「為」としてまとめたもので、「行わなければ得られない」という意味であるという。また「居」と「⿺辶丞」に

[46] 簡帛網「簡帛論壇」“清華簡《畏天用身》初讀”第 7 樓、第 22 樓、2023 年 12 月 12 日・2024 年 3 月 13 日。

ついては駱珍伊(2023)に従い、「居不極」とはすなわち「止不至」で、『荀子』修身「道雖邇，不行不至」のようなものであるという。

按：「  [47]」について、駱珍伊(2023)に従い「亟」の誤字であるとみなす。ここまで頻出していた「𢘑」、および当該字の直後の「𢘑」に引かれて「亟」と書いてしまったのだろう。なお、「亟（極）」は「  [48]」(郭店楚簡『唐虞之道』19 号簡)のように書かれるが、その右部の「攴」が「卜」に簡略化される現象は古文字中に散見される(例えば上博楚簡『恆先』12 号簡  [49])[50]。

［第七章］
𢘑（恆）又（有）不可智（知）▂，難智（知）【1】▂。時（志），亡（無）不智（知）【2】▂。思，亡（無）不宎（天）【3】▂。忎（固），亡（無）不能【4】▂。舊（久），亡（無）不沾【5】▂。弗為，不能▂。弗思，忘【6】▂。［五号簡途中］

訓読：
恆に知る可らざる、知り難き有り。志ざさば、知らざる無し。思わば、天たらざる無し。固くせば、能わざる無し。久しくせば、沾(うるお)さざる無し。為さざれば、能わず。思わざれば、忘る。

現代日本語訳：
知ることができないということは常に有り、知り難くなってしまう。(しかし)知ろうとすれば、知らないということはない。考えれば、天に違うということはない。(考えが)しっかりとしていれば、できないことはない。長い時間(行えば)、(考えが)染み入らないということはない。(これらを)為さなければ、できない。考えなければ、忘れてしまう。

【1】𢘑（恆）又（有）不可智（知）▂，難智（知）▂。
駱珍伊(2023)は、知ることのできない事や状況が常にあり、こうした事情や状況の結果は往々にして知ることが難しい、という意味であるという。

---

47 清華大学出土文献研究与保護中心編・黄徳寛主編(2023:上冊 95)。
48 武漢大學簡帛研究中心・荊門市博物館(2011:248)。
49 馬承源(2003:71)。
50 蘇建洲(2018)参照。

【2】時（志），亡（無）不智（知）▃。

劉子珍(2024)は「時」を「志」に読むのではないかという。そして「志」は「知」に近い意味であるとして『礼記』哀公問「子志之心也」等を引く。

子居(2024)は劉子珍(2024)に従い「志」に読み、「思慮」の意味であるとした上で、『管子』九守「以天下之心慮，則無不知也」等を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)も「知」との関連から「志」に読む。通仮の例として郭店楚簡『五行』では「志士」を「時士」に作ることを指摘する。また「志」と「識」が通用するとし、「志」と「知」の意味が近いという。

駱珍伊(2023)は「もし「時」ができれば知らないことはなくなる」という意味であるという。「時」については「持」に読み、「守る」の意味を表すのではないかという。そして当該箇所以下では「思」「固」「久」という積極的な行動によって「無不天」「無不能」「無不沾」となり、「時，無不知」という境地に至ることを言っているとする。

按：劉子珍(2024)、陳民鎮・宋亞飛(2024)に従い「時」を「志」に読む。

【3】思，亡（無）不（天）

[整理者]は、「」が伝抄古文に「天」として見えることを指摘する。また上博楚簡『亙先』5号簡に「知幾而亢（罔）不（天）」、行氣玉銘（『集成』19570）に「行氣，（天）則蓄，蓄則伸，伸則下，下則定，定則固，固則明，明則長，長則復，復則天。」、および三晋の璽印に人名として見えることを指摘する。そして本篇の「天」は、「天」の一種の極致状態に等しいとし、『鶡冠子』天則「捐物任勢者，天也，捐物任勢，故莫能宰而不天」を引く。

陳民鎮・宋亞飛(2024)はこの「（天）」は述語として用いられており、文脈から見れば「知」「能」「沾」と近い、プラスの意味を表すとする。そして上博楚簡『恒先』に「智（知）既而亢（荒），思不（天）」とあり、本篇の内容と近いという。

子居(2024)は、「不天」が『左伝』宣公十二年「鄭伯肉袒牽羊以逆，曰，孤不天，不能事君，使君懷怒，以及敝邑，孤之罪也，敢不唯命是聽」、清華簡『越公其事』「今吳邦不天，得罪於越」(第十一章)などを引く。そして「不天」とは「不順天」の省略であり、「思無不天」とは、思慮が天道に沿うということであるという。

按：[整理者]のいう伝抄古文の「」は「  [51]」(『汗簡』)のようなものであろう。

「天」の意味については、子居(2024)に従う。なお、本編では「天」と「」の両方が現れるが、意味や品詞性による使い分けがなされている可能性はある[52]。

【4】忘（固），亡（無）不能▃。

[51] 徐在國(2006:3)。

[52] 上述の研究班における野原将揮氏のご指摘による。

[整理者]は「忎」が「心」に従い「古」声であるとし、「固」に読む。また「固」を伝抄古文では「忎」に作ることもあるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は「專一」「ゆるぎない」という意味であるとし、『国語』周語上「惇帥旧德，而守終純固」韋昭注「固，一也。言犬戎循先王之舊德，奉其常職，天性專一，終身不移。」を引く。

子居(2024)は「忎」を「故」に読み、「以前の、旧来の、すでに存在する事」を意味するという。そして『国語』晋語八「諸侯之故，求治之，不求致也」韋昭注「故，事也」を引きつつ、類似の表現として睡虎地秦簡『語書』「凡良吏明法律令，事無不能殿」を引く。

按：[整理者]、陳民鎮・宋亞飛(2024)に従い「忎」は「固」に読む。ただし、「忎」が「心」に従うことに鑑み、心理的な側面を述べたものと解釈する。

【5】舊（久），亡（無）不沾▬。

[整理者]は「沾」は「染み込む、染まる」の意味であり、古文献では「霑」にも作るという。

劉子珍(2024)は「沾」は「益」の意味であるという。

陳民鎮・宋亞飛(2024)は、「沾」の「染み込む、染まる」の意味は先秦文献では常用されないとし、「覘」あるいは「貼」に読むのではないかとし、「観察する、こっそり見る」の意味であるとして『説文』「覘，窺也」、『方言』「貼、占、伺，視也」、『礼記』檀弓「我喪也斯沾」鄭玄注 「沾讀曰覘」などを引く。また武威漢簡『士相見之礼』「呫嘗膳」を今本『儀礼』が「遍嘗膳」に作るとし、「沾」が「遍」を表すのかもしれないという。

子居(2024)は、「舊」は「故」の意味であるという。また郭店楚簡『性自命出』と類似しており、魯文化の特徴であろうという。また「沾」は「瞻」に読む。

按：「沾」について、陳民鎮・宋亞飛(2024)の指摘する通り時代的な問題点はあるものの、ここでは[整理者]に従っておく。

【6】弗思，忘▬。

駱珍伊(2023)は「忘」を「荒」に読み、行為を行わなければ「知」という結果が得られず、すでに知っても考えなければ、「荒廃」という結果を招きうるということを述べているという。

子居(2024)は「忘」は如字に読み、『荀子』礼論「哀痛未盡，思慕未忘」などを引く。そして「弗為不能」の「為」は前文の「思慮」を指し、「志無不知，思無不天，故無不能，舊，無不瞻」はみな、常に思うことによって実現することができ、反対に「弗思」であれば「忘」れてしまう、ということを言っているとする。

按：子居(2024)に従い「忘」に読む。